

特集論文：「福祉の哲学、価値、思想」について

社会福祉における価値

—いのちの視点から—

藤井 美和

関西学院大学人間福祉学部教授

● 要約 ●

ソーシャルワークは価値と知識と技術の総体とされ、価値はその根幹であるとされてきた。日本の社会福祉は、その実践家の価値・思想・信条に支えられて発展してきたものの、社会福祉が制度化され、ソーシャルワークが科学的アプローチを求められていく中で、価値や思想について議論することは少なくなっていた。本論の目的は、社会福祉実践の拠り所である価値の必要性を改めて問い直すことにある。そこでまず価値とは何かについて議論し、価値判断において主体が持つ「より善いもの、より望ましいもの」という判断基準が何であるかを示し、そこから生まれるいのちの相対化を肯定する議論－優生思想とパーソン論－をレビューした。そして社会福祉・ソーシャルワークに求められる人間観についてスピリチュアリティを含む「全人としての人」の視点から考察し、今後のソーシャルワークが、人間の究極的価値を基盤とした知識と技術の総体という原点に回帰することの必要性を提言した。

● Key words : 社会福祉の価値, 人間の尊厳, 優生思想, パーソン論, 全人としての人

人間福祉学研究, 11 (1) : 43-55, 2018

1. はじめに

日本の社会福祉実践の歴史を見ると、その開拓者たちは、困難の中にある人そのものに深い関心を寄せ、その尊厳を守るために、ときにその人生のすべてをかけて社会変革に身を投じてきた。苦難の中で彼らを支えたものは、自己実現や社会的承認といったものとは別次元の、価値、思想、宗教や哲学にもとづく確固たる信念であった。

戦後、社会福祉政策が公的なものとして制度化されていく中で、社会福祉実践は、法的・制度的枠組みに則るものとなり、実践基盤である価値、思想、哲学について議論されることがなくなっていった。このような状況は、実践現場だけでな

く、専門職者を養成する教育機関においてより大きな問題である。

現代社会の在りようは、社会福祉の価値、思想、哲学の必要性を迫ってくる。戦後の高度経済成長によって貧困を脱したかのように見えた社会は、今、格差社会といわれる構造的貧困を生み出した。希薄な地域社会での孤立死や自殺は、これまでと違った取り組みが求められる。医療の進歩に目を向けると、人は長寿を生きる恩恵を得た半面、その生死は操作可能なものとなった。さらに人工知能に見られるような科学技術の進歩もまた、人間存在の意味や生きる意味、幸せとは何かという根源的な問いを突き付けてくる。このような問いは、経済的豊かさや科学的・合理的視点か

らだけではその答えに迫ることはできない。このような時代だからこそ、社会福祉はもう一度、その根幹にある、価値、思想、哲学に目を向け、人間とは何か、幸福とは何か、社会福祉は何を目指すのかを再考する必要がある。

本論では、社会福祉の「価値」に注目して、人間の尊厳や社会の在り方について、筆者の学問的背景である死生学をもとに議論を展開する。紙面の都合上、価値の議論や社会正義についてはその外観を述べるにとどまらざるを得ないが、ここでは、社会福祉が「価値」を議論することに、どのような意味があるのか問題提起することを目的とする。

なお価値の議論については、日本における社会福祉の価値と、欧米でのソーシャルワークの価値についての文献を紹介しながら進めるため、本論では「社会福祉」「ソーシャルワーク」を一つに統一せず、そのまま用いることとする。

2. 社会福祉の価値

2.1. 価値とは

「社会福祉の価値」を論じる前に、まず「価値」とは何か考えてみたい。見田(1962)は、価値を、主体の欲求を満たす客体の性能であり、その一般的機能は、意識的行為における選択の基準であると定義している。嶋田(1980)は、Kluckhohn(1951)の定義を引用して、「価値は、行為者にとって可能な種々の遣り方、手段、目的のなかから、選択するにあたって影響を与える『望ましきもの』(The desirable)に関して、個人あるいは集団の抱く明示的もしくは暗黙の概念」(p. 6)だとしている。全米ソーシャルワーカー協会のソーシャルワーク実践検討委員会でも“Values (中略) refer to what is regarded as good and desirable”と説明され、価値は、何が善く何が望まれるかを示すものとされている(Bartlett, 1970)。

このように、価値は評価主体が何を善いもの、

望ましいものと判断するかの基準(モノサシ)であり、これがものの見方を支えている(藤井, 2010)。したがって人間の行動、選択、態度は、価値(モノサシ)によって影響を受けることになる。価値は、歴史的、文化的、時代的、社会的背景といったさまざまな条件のもとで形成されるため、その価値観はさまざまである。また、ある時代に生きるある人の価値観は、その置かれた状況によっても変化する。そして、ある人の欲求(望ましき)を満たすことが、他の人の欲求や権利を妨げることも起こってくる。ここに社会正義の問題が生じるのである。

価値多様といわれる現代、何を望ましいものとするのか、すべての人の共通理解として価値を定義することは困難な作業だろう。しかし、その中で、時代や文化を超えて普遍的な価値(究極的価値)がある。その一つが人間の尊厳である(Pearce, 1996)。

2.2. ソーシャルワークの価値

ソーシャルワーク実践の本質的な要素は、価値・知識・技術であり、ソーシャルワーク実践は、価値と知識と技術の総体であるといわれる(Bartlett, 1970)。Gordon (1965)は、ソーシャルワークは専門職の中でも、もっともその価値を基盤とする職業であるといい、Reamer (1999)は、ソーシャルワークのフレームワークは一連の価値(a set of values)であるという。

またソーシャルワークはその実践が重要な部分である限り、価値自由(中立性のために価値判断を排除する)という立場をとることはできない。実際、社会福祉実践のさまざまな場面で、価値は絶えず問われている。福祉領域で働くことにおいて価値自由という道はなく(Pearce, 1996)、ソーシャルワークなどの対人援助実践は、倫理綱領や正義や人権に根差しているがゆえに、すでに何らかの価値や真理に関わっている(Canda & Furman, 2010)と考えられる。秋山(1980)もまた、主体的価値判断(専門的価値判断)なくして

社会福祉実践はあり得ないと主張している。このように、価値はソーシャルワーク実践、社会福祉実践の基盤をなすものであり、それゆえ、実践者（ソーシャルワーカー）は、自己の価値観についての洞察と他者のもつ価値観について、常に敏感でなければならない（Canda & Furman, 2010）。

2.3. ソーシャルワークの価値、知識、技術の関係

ソーシャルワークの3要素の一つ、価値についてはこれまで述べてきた。では知識と技術は、価値とどのような関係にあるのだろうか。知識は、人を理解しそのニーズを知るためのものである。それは、環境とその中の人を理解する知識だけでなく、価値にもとづくソーシャルワーク実践を導き出す根拠となる理論やモデルが含まれる（Brown, 1996）。実践の技術は、それらを根拠として導き出されるものであるから、あるケースにおいて介入のレパトリーがなく、新たな方法を見出さなければならない場合は、技術的な可能性を探るのではなく、常に価値にもとづく知識から導き出されなければならない。

このように、価値、知識、技術はそれらが並立しているのではなく、ソーシャルワーク実践において、価値は常にその根底にあり、知識と技術を支えていると考えられる（図1）。

これは次のようなたとえで説明すると分かりやすい。核分裂の「知識」があり、その知識を用いた原子爆弾を作る「技術」を手に入れた。では、それを用いて原子爆弾を作るのか—それは、原子

爆弾を作りそれを使うことにどんな意味があるのか、それが人類にとってよいことなのかという「価値」判断である。あるいは、クローンをつくるための「知識」があり、クローン作製の「技術」が獲得されたとして、クローン人間をつくってよいのかという議論は、クローン人間を生まれさせることが望ましいものであるのかという「価値」判断の問題である。出生前診断による選択的人工妊娠中絶、代理母出産、延命治療や安楽死等、目覚ましく進歩する現代の科学技術によって、私たちの生活や生き方は大きな影響を受けている。技術はただそれだけで進歩していく。ソーシャルワーク実践においても、知識と技術が価値に支えられていなければ、何を望ましいものとして実践するのか、その根拠を見出すことはできないのである。

では、価値が示す望ましきや善いものとは何を指すのだろうか。嶋田（1980）は「望ましきもの」（The desirable）に関して、個人あるいは集団の抱く明示的もしくは暗黙の概念としているが、現代社会における個人や集団の示す「望ましきもの」は必ずしも一つの方向を示しているとはいえない。むしろ望ましきものは、個人によって異なり、社会においても絶えず揺れ動いているといえる。この点について、価値の構造から考察してみたい。

価値は、その判断基準が及ぼす内容によって三重の構造を持っていると考えられる（藤井, 2015）（図2）。その表層部分は、「変化しやすい価値観」であ

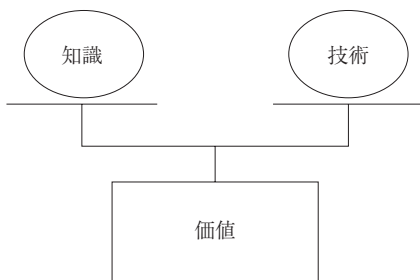


図1 ソーシャルワークの価値・知識・技術

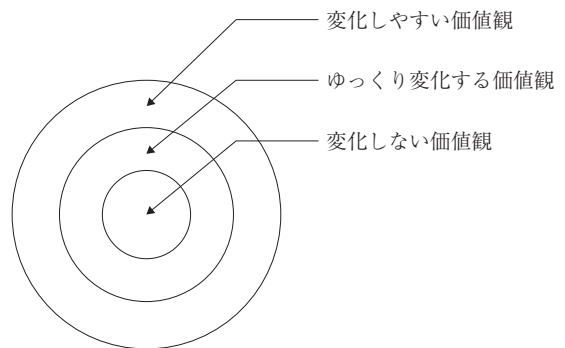


図2 価値の三重構造

出典 藤井美和(2015)『死生学とQOL』p.20 関西学院大学出版会

る。これは、何が善いのか、望ましいのかという判断が、個人の好みに拠るものである。したがって、状況が変わればそれに応じてすぐ変化するモノサシである。その代表的な例は流行である。流行のモノサシは毎年変化する。昨年はAタイプの服が好ましいとされていたが、今年はAタイプの服はすでに時代遅れであり、Bタイプの服を選ぶ。ところがその翌年は、Cタイプの服を着なければ時代に乗り遅れる、というようなものである。個人の生活上の好みの選択のように判断基準が短い期間で変化するのが、表層にある変わりやすい価値観である。

この表層的な価値観の内側にあるのが、「ゆっくり変化する価値観」である。これは、個人的な好みや志向とは異なり、時代や文化に影響を受けて変化するモノサシである。この価値観は、時代と共に少しずつ変化し、数十年、あるいは数世代を経て、大きく変化するものである。結婚観はその例の一つである。1950～60年代は、結婚してから子どもをもつのが当然であり、結婚前に男女が同棲したり子どもをもつことは社会的に受け入れられていなかった。しかし現在では、一緒に住んでから結婚する、あるいは子どもを授かったことをきっかけに結婚する、ということは非難されることではない。またしつけに対する価値観もその一つである。しつけとして、ときに暴力を伴う力と権威によるスパルタ式がよい教育だといわれていた時代から、数十年たった今では、そのようなしつけは虐待とみなされるようになっていく。男女共同参画や受動喫煙防止なども、長い時期を要して変化してきたものである。このように、時代や文化の影響によって変化するモノサシが、ゆっくり変わる価値観である。

そして価値観の中心部分にあるものが、普遍的性質としての「変化しない価値観」(あるいは「容易に変化しない価値観」)である。この例として挙げられるのが、人間の尊厳である。人は常に尊厳あるものとされなければならない。これは個人においても社会においても共有される普遍的性質

をもつモノサシである。人が生まれること、死ぬことは、自然の摂理であり、時代や文化を超えて畏敬の念をもって受け止められてきた。ところが一見当たり前のように思われるこのモノサシも、現代は「変化するもの」となってきた。出生前検査によって胎児の障がいが明らかになると人工妊娠中絶を選択する現状がある。「生きたい」と願う寝たきりの人が、「いつまで生きるのか」という周りの圧力によって、安楽死を選ばざるを得ない状況も今後起こりうるだろう。現代は、生と死が人の手に委ねられ、いのちの尊厳という普遍的価値が、価値判断を伴うものになっている。

いのちが、「望まれるもの」と「望まれないもの」という価値判断の対象となれば、いのちの価値は相対的なものになる。いのちが相対的価値であるなら、モノと同じように、優れたものや欠陥のあるものといった選別がなされるのは当然の帰結である。

2.4. 何が善いもの、望ましいものなのか

善いもの、望ましいものに普遍的な性質や社会的合意は取れないのだろうか。なぜ、普遍的価値と考えられるいのちの尊厳すら相対化され、人間の価値判断一つで生まれるべきもの、死ぬべきものが選別されるのか。そのためには、価値判断の主体がもつ「善いもの、望ましいもの」が、どのような性質であるかを見る必要がある。

一般に、「善いもの」「望ましいもの」は、その主体の欲求(ニーズ)と考えられがちである。欲求(ニーズ)については、Maslow(1968;1971)がその欲求階層説で示したように、人間は低次の欠乏欲求(生理的欲求、安全欲求、愛情・所属欲求、承認・尊重欲求)が満たされることで高次の欲求(自己実現欲求)を希求し、成長に向かうとされている。したがって、ニーズは人間が成長するために満たされるべきものと理解されることが多い。しかしMaslow(1971)は、成長志向にあり自己実現する人は、たやすく自我を忘れることができ、自我を超越し自己意識をもたないで客観

的世界に取り組むことができるという。これは、成長欲求におけるニーズが利己的なものでないことを示している。人間の利己的な欲求にはきりがなく、次から次へと何かを獲得することにエネルギーを注ぎ、終わりをみることをない欲求は“わがまま”ともいえる。一方、自我を超越する視点から「望ましいもの」を見れば、それが“わがまま”とは異なる性質をもつことは明らかである。望ましいというのは、利己的欲求とは一線を画するものなのである。嶋田（1980）も、「常識的というその時々々の欲求（ニード）は、（中略）「ニード」と呼ばれるべきものでさえなく、実は「ウォント」、言い換えれば「欲しきもの」(The desired)であるにすぎない」(p. 9)として、「望ましきもの」(The desirable)と「欲しきもの」(The desired)を区別している。

障がいのある子はいらない、知的レベルの高い子がほしい。これは、子どもの存在を無条件に受け入れるという望ましき (desirable) より、自分の望む条件を満たす子どもがほしいという利己的欲求 (want) が優先していることを示すものだといえる。

3. 人間の尊厳—価値の相対化

では次に、いのちの相対化や人間の相対価値を肯定する議論を見てみよう。ここでは優生思想とパーソン論を概観する。

3.1. 優生思想

優生学は、進化論を唱えたチャールズ・ダーウィンのいとこ、フランシス・ゴルトンが1883年に提唱したものである。ダーウィンの進化論は「自然淘汰」で知られるように、環境に適応するものがその性質をもって生まれ、そうでないものは淘汰されていくというものである。ゴルトンは進化論に着目し、人間を優れた状態に発展させることに価値を置いた (米本, 2000)。そのため、自然に排除されていく弱者を保護する政策は誤り

であるとして、しばしば福祉財政への批判の根拠としても用いられた。そもそも適応できない (淘汰される) 人を公的に支援することは、社会に貢献する優生な構成員の財政負担を増やすことになり、彼らの権利が阻害されるというものである。そこには、すべての人が社会の構成員であるという見方は存在しない。

優生学は人間の遺伝形質によってその価値に差をつけるものであり、価値がないと判断された人間の尊厳が深く傷つけられたことは歴史が示すとおりである。ナチスドイツによるホロコーストは、ドイツ民族を優秀なものにするために行われた障がい者、ジプシー、ユダヤ民族等の抹殺であった。国内のハンセン病患者への過酷な隔離や断種も、障がい者の優生手術も、戦後の優生保護法によって合法化された。1966年、兵庫県で始まった「不幸な子どもの生まれない運動」も優生思想に基づいたものであり、2016年の相模原障がい者殺傷事件も優生思想を信奉する加害者によるものだった。

優生保護法が撤廃され、母体保護法が施行されたのは1997年。わずか20年ほど前のことである。優生学に基づく国家政策はもはや存続しないが、個人の自発的選択として、いのちの選別は今なお行われている。これが「内なる優生思想」である。すでに実現可能になったデザイナーベイビー (優秀な遺伝子をもつ精子や卵子を購入して自分の望む子どもをもつこと) は、価値ある子どもをもちたいという、内なる優生思想の現れだといえる。

ところが、優生思想 (内なる優生思想) を「善いもの」「望ましいもの」と信じて生きていくと、ある時、そこに大きな落とし穴があることに気づく。それはどんな優れた人間であっても、人は必ず死ぬ存在だということである。優れていることに生きる根拠を見出してきた人も、歳を重ね、病を患い、障がいもち、いずれは自らが排除してきた「望まれないもの」になる。そうなったとき、人はどこに自己存在の根拠を見出すのだろう。

フランスの哲学者、Jankélévitch (1978) は「死」

の捉え方として、人称の捉え方を示している。3人称の死は客観的な死であるが、2人称の死（愛する人の死）、1人称の死（私の死）へと視点を移すにつれ、死はより主観的なものとなる。どの立場で死に向き合うかによって、死のもつ意味や解釈が異なると考えられる。この議論は死に限らず、生きる根拠においても同じである。先に述べた内なる優生思想が、自分自身の存在価値を測る価値基準になることを、私たちは1人称になるまで気づかない。3人称としての優生思想は変化しない。しかし、それを根拠に生きる人間は、2人称の立場になるであろうし、最終的には必ず1人称の立場になるのである。

また優生思想の立場に立つ人（3人称）は、何らかの不自由をもつ人たちの1人称の「幸せ」を実感をもって受け止めることは難しいだろう。「障がい者は不幸である」「高齢者は社会の負担である」というようなステレオタイプは常に3人称の視点であり、その視点に立つ限り、1人称が生きる豊かな世界を見ることはできない。

一つの例を挙げてみよう。16年寝たきりの妻を介護する70代の男性は、妻が心筋梗塞で救急病棟に運ばれ、担当医から見込みがないといわれたとき、家で最期を看取りたいと、すべてのチューブを抜いてICUから自宅に連れて帰った。そのとき筆者に送られたメールは次のようなものであった。「私がかけつけた時はまるで死んでるように見えました。（中略）救急医の話では、心筋梗塞を起こしてるが、手遅れでカテーテルなどはできず手の施しようがない。いつ再発するか予断を許さないということなので、最期を自宅で看取ることにして、自宅に引き取りました。しかし奇跡的に、『退院して1ヶ月後の誕生日』を迎えることが出来ました。思えば、最初に倒れてから16年の長きにわたり、身動きもできず、言葉も話せない苦しい中で家族の生きる支えとなってくださったことはどんなに感謝してもしりません。主が彼女を苦しみから解放するために召されるのであらうと思いつつも1日でも長く生きて欲

しい気持ちを抑えることができない日々を過ごしております」。

私たちが3人称から見る世界は「夫は妻の介護を16年も続けて立派だ」「妻はなんと幸せな人のだろう」というものであるが、1人称が見る世界は、「思えば最初に倒れたから16年の長きにわたり身動きも出来ず、言葉も話せない苦しい中で家族の生きる支えとなってくださったことはどんなに感謝してもし足りない」というものである。これが1人称の世界観なのである（藤井、2015）。このように、1人称の立場から見えてくる世界は、客観的な見栄えのよさや物質的な豊かさとは別のところにあるといえる。

3.2. パーソン論

パーソン論は、人間をその性質上の違いから「ヒト」と「パーソン（人格）」に二分する。「ヒト」は、ホモ・サピエンスという種に属する生物学的意味しかもたない。一方「パーソン」は、自己意識をもった理性的存在であり、生存価値のある存在だとする。Tooley（1972）は、ある人（A）に自己意識がなければ、その人（A）はパーソンではなく、生命権の主体となりえない。よってAに自己意識がなければ、Aの生命権を奪うことも認められる、と説明している。つまりパーソンであることが存在価値を認めるための条件となる。

では、ヒトとパーソンを分ける自己意識とは何を意味するのか。自己意識をもつとは、ある期間にわたって存在し続ける独立した実態（持続的主体）であると認識できることである（Tooley, 1972）。言い換えると、継続する時間（過去・現在・未来）の中で同一性をもって持続する自己についての意識をもつことを意味する。自己意識をもつパーソンは、生き続けたいという未来志向的欲求（選好）をもつことができるため、その選好に反してその存在（パーソン）を殺すことは不正であるということになる。一方、生物学的存在としてのヒトは、自己意識をもたず、生きたいという欲求（選好）をもつことがないため、それを抹

殺することについての問題は生じないことになる(浜野, 2017)。

Singer (1993) はその著書『実践の倫理』の中で、胎児や無脳症児のような重症の新生児、植物状態や脳死状態といった人のいのちに価値を認めることに疑問を呈し、古い戒律「人命をすべて平等の価値をもつものとして扱え」を捨て、新しい戒律「人命の価値が多様であることを認めよ」に書き換え、「決定したことの結果に責任をもて」と主張する。これによれば、胎児、新生児、重度の知的障がい児・者、遷延性意識障がい者や脳死状態の人を殺すことは、それ自体に道徳的問題はない。重度障がいをもつ新生児を死ぬに任せる選択をする際、あるいは遷延性意識障がい者を介護する際、親や家族が「ヒト」である存在を、あたかも「パーソン」(人格的存在)とみなして関わることは、過剰な配慮であるという¹⁾。

障がいのある胎児の堕胎、植物状態の人の積極的安楽死というようないのちの選別にあたって、選好功利主義はその問題に関わるすべての関係者の選好(好ましさ = preference)がより充足される決定を是とする。パーソン論の立場に立つと、当事者(例えば、障がいのある胎児や植物状態の人)は、そもそも選好をもたないため、その生存は周りの選好次第となる(しかしながら厳格なパーソン論であれば、それは「ヒト」であり、生存権のないものについて、いのちを議論すること自体無意味となる)。

パーソン論への批判として、人間を「ヒト」と「パーソン」に分ける、その境界のあいまいさが指摘される。つまり、自己意識を基準として、二分法的な人間の線引きが厳密にできるのかという点、また自己意識や理性といった知的側面を存在価値の基準とした点への批判である。自己意識や理性をパーソンの要件にすることは、一側面から人間全体を評価しようとするものであり、身体の中でも脳に特別な位置が置かれているようにさえ見える。そして一番の問題点は、人は関係性の中で生きているにもかかわらず、その関係性が無視

されている点である。浜野(2017)は「人は人によって人として扱われることによって人となる」(p. 7)と表現して、人間が他者との関わりの中で変化する存在であることを主張している。筆者はこの関係性は、人との関係性だけでなく、自然の中で生かされるいのち、大いなるものから与えられたいのちといった、いのちの神秘や人間を超えるものとの関係性、超越的視点を含んだものであると考える。

優生思想もパーソン論も、人間の遺伝形質や自己意識といった基準を設け、人間存在の価値を相対化する。優生思想や内なる優生思想は優れた人間と劣った人間を選別し、選好功利主義は利害関係者の選好がその対象となる人の生存を決定する。人のいのちの評価・選別を、同じ社会の人間が行うことを正当化する社会とは、どのようなものだろうか。ここで、人間の尊厳と社会正義の関係についてみてみたい。

4. 人間の尊厳—社会正義

正義が実現される公正な社会では、その構成員は公平に扱われる。そこには自ずと社会が構成員の尊厳を保障することが前提となるだろう。しかし、社会が構成員の存在価値を相対的に捉え(つまり、あらかじめ尊厳が守られるべき人とそうでない人を定め)、守られるべき人の人権が保障されていることを根拠に、正義が実現されていると宣言するのは、正義の議論の破たんではないだろうか。人間の尊厳や人権を普遍的価値とするからこそ、社会正義はその実現が常に課題となるのである。そう考えると、社会正義の議論は結局のところ、尊厳ある人間とは何か—一人の存在価値は無条件なのか、条件付きなのか—という議論から始めなければならないことになる。

「最大多数の最大幸福」をスローガンとするベンサム功利主義は、社会の中でできるだけ多くの人が多量の快(幸福)を得る選択が正しいとする(児玉, 2010)。できるだけ多くの人

ることには頷ける。しかし病気や障がいをもつ人は、常に少数派であり快を享受する機会が与えられない。その意味では公正な社会とはいえないだろう。しかし優生政策においては、そもそも劣った人たちは排除の対象であるから、彼らが快の獲得対象から排除されること自体、問題としないのである。

選好功利主義における正しい決定は、関係者の選好 (preference) がどれだけ充足されるかという基準であるが、個人の選好 (preference) が、いわゆる“自我を超えて客観的に世界を見る望ましい (desirable) もの”であったとしても (そのような選好をもつことができるか疑問であるが)、そもそも自己意識のない「ヒト」は尊厳を守るべき対象にはならない。もし人のわがまま (want) が、選好の名のもとに満たされていくなれば、社会は自由至上主義へ向かって行くことになるだろう。自由至上主義で公正な社会はどのように実現するのだろうか。人間は、関係性の中で生きるのであるから、同じ共同体として生きるという価値を見出していくことが必要なのではないだろうか²⁾。

社会正義の議論が、人間存在をどのようにとらえるかという人間観からスタートするとして、はたして社会福祉は人間をどのようにとらえればよいだろう。

4.1. 人間観—人間存在をどのようにとらえるか

コペルニクスの地動説やニュートンの万有引力で知られる 16 世紀の科学大革命によって、すべての事象は科学的・合理的に説明できるという科学的価値観が支配的となった。それまで Body-Mind-Spirit として捉えられていた人間は、エビデンスの取れる実証可能な Body-Mind の領域から説明されるようになり、科学的に説明できない Spirit の部分は人間理解から切り落とされた (図 3)。

近年は、Mind の中でも脳に重きが置かれ、人間そのものを、脳の働きから説明することが多くなっている。人間の全体が科学で説明できるのであれば、いのちはどこからやってくるのか、人は死ぬのになぜ生きるのか、生きる意味は何か、という本来人間存在の根拠をなす部分が、人間理解から切り離されてしまうことになる。

ソーシャルワークも科学性が求められ、Evidence-Based-Practice (EBP) が推奨されてきた。EBP は実践の根拠を示すものであり、実践の質の向上のためには必要である。しかし、実践の根源にある問い—何が望ましい生活なのか、何が満足度の高い人生なのか—は、全体的人間を理解しなければ答えられない。例えば、医学の進歩による延命は Body-Mind においては歓迎された。しかし、次第に延命至上主義に疑問がもたれ、Quality of Life (QOL) が注目されるようになって

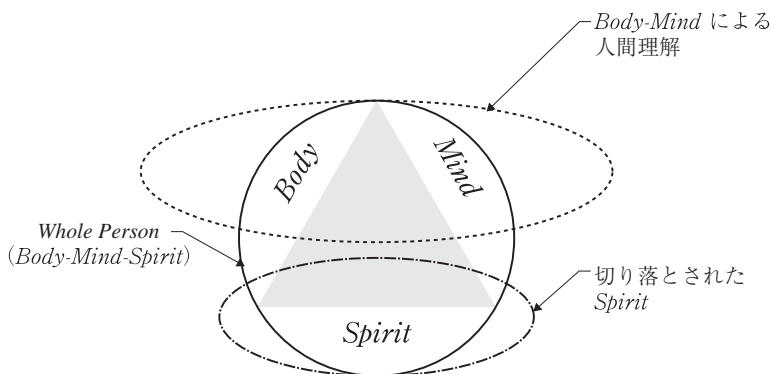


図 3 全人としての人 Body-Mind-Spirit

出典 藤井美和 (2015) 『死生学と QOL』 p. 50 関西学院大学出版会

たのは、Body-Mind だけでとらえられない Spirit からの問い—人間らしさとは何か、生きる意味とは何か—といった人間の根源的な問いに気づいたからである。Body-Mind-Spirit への「全人回帰」は、先端科学で分断された人間存在をもう一度統合することの重要性を示している。

4.2. Spirit—スピリチュアリティ

ここで、スピリチュアリティの意味するところを整理しておきたい。スピリチュアリティとは、人間存在に意味を与える根源的領域（藤井, 2015）であり、言い換えると、どのような状態であっても自分の存在をよしとすることができる、その根拠となるものである（藤井, 2010）。先の、植物状態の妻を介護する夫の例から分かるように、1人称の主観的世界観は、スピリチュアリティの特性を有したものである。スピリチュアリティはその人の身に起こった事柄の意味付け、自己や他者を理解する際に働く価値基準の性質をもつともいえる。宗教的、非宗教的であるにかかわらず、スピリチュアリティは、「私がここに置かれている」そのことに意味を与えるものであるがゆえ、すべての人に普遍的に備わっているものであり、自己に向かうのと同時に、自己を超える超越的なものにも向かう性質を有している。

Tornstam (1993) は、人は老年期においてこれまでの物質的・合理的視点から、より神秘的・超越的視点に移行することで人生の満足度を増加させることができるという「老年的超越 (Gerotranscendence)」の概念を示している。老年的超越に至る人は、身体的な健康や社会的評価にとらわれることなく、今あるいのちを感謝して生きるというのである。これは、自己存在をスピリチュアルな視点から見ることから生まれる喜びだと考えられる。

社会福祉実践において実践者がもつ人間観についても、ここに学ぶべきものがあるのではないだろうか。病氣、障がい、高齢…そのような目に見える違いから人間を理解しようとするれば、その特

性だけが常にクローズアップされ、実践者とクライアントの距離はどこまで行っても縮まらない。いつまでたっても助ける側と助けられる側である。しかし、そもそも、私たちはどの人にも同じようにいのちが与えられ、それを受け取って生きている—このような根源的な視点に立つなら、人間がここに在ることには何の違いも見当らない。社会福祉の人間観は、「違い」を超えるのではなく、そもそも「同じであること」に気づくことによってつくり、そこに共に生きる価値が形成されるのではないだろうか。

日本の社会福祉やソーシャルワークにおいては、スピリチュアリティを含めた人間理解に違和感を覚える人もあるかもしれない。しかし、人間が何において同じなのかといえば、それは、人間の根源的な存在意味にあるとしかいえない。それぞれが同じく尊いという普遍性を語ろうとすれば、スピリチュアリティ抜きに語る（身体的・心理的・社会的側面のみで語る）ことの方が、不自然であると筆者は考える。

実際、科学的人間理解から、スピリチュアリティを含めた全人理解への移行は、世界保健機関 (WHO) の動きが大きく影響している。WHO は健康の定義「健康とは、完全な肉体的、精神的及び社会的福祉の状態であり、単に疾病又は病弱の存在しないことではない」(WHO, 1946) (訳厚生労働省資料) に代わるものとして、1998年に健康の定義改正案を提出した (WHO, 1998)。改正案は、「健康とは完全な肉体的 (physical)、精神的 (mental)、spiritual 及び社会的 (social) 福祉の dynamic な状態であり、単に……」(訳厚生労働省資料) と、従来の定義にスピリチュアリティの領域を加え、それらがダイナミックに影響しあっていることを打ち出した。この動きは、科学偏重的な人間の見方から、全人として統合された人間の見方 (Body-Mind-Spirit) への転換であり、WHO の示した人間観は、バラバラで理解されていた人間を統合して理解しようとする「全人回帰」である。嶋田 (1980) はそれより以前に、「全人

的人間の統一的人格の確立」こそが、社会福祉の出発点である「人権」の拠って立つ価値観の内容を示すものと主張している³⁾。

社会福祉の見る人間観は、問題をもつ人間の側面に焦点を当てるものではなく、問題をもつ人の全人的苦しみに立つものでなければならない⁴⁾。そうでなければ、優生思想やパーソン論のように、問題のある存在を社会でどう扱えばよいか、というアプローチしか生まれてこない。「ここにいる人の苦しみは、私をもつ苦しみだったかもしれない」「私のもつ価値観が作り出したこの社会が、この人を苦しめているのではないか」—このようなものの見方が私たちに欠落しているように思われる。社会の価値観を形成しているのは個人の価値観である。社会が変わるためには、一人一人がその価値観・人間観を問い直すところからしか始まらない。だからこそ、社会福祉の価値や思想は、人間と社会に関わるとき、その知識や技術以上に重要なものなのである。

4.3. 社会福祉の原点回帰

日本の社会福祉実践は、実践家の揺るがざる信念—それは、思想であり哲学であり価値や信仰であった—によって発展し、どのような状況にある人の尊厳も守られなければ、社会正義は実現しないことを教えてくれた。しかし先に述べたように、社会福祉やソーシャルワーク教育が実践の知として構築され、また教育において科学的アプローチに重きが置かれていく中で、人間存在とは何か、人間の尊厳とは何かという議論はほとんどされなくなっていった。社会福祉は今こそ、分断された価値、知識、技術の3要素を統合する必要があるのではないだろうか。WHOが人間理解において、全人的人間へと回帰したように、社会福祉も、価値を根底とした知識と技術の総体としての「原点回帰」が必要である。さもなくば、社会福祉は自らの拠って立つ基盤を失うことになりかねない。

人間理解を支える全人回帰、社会福祉実践を支

える原点回帰は、科学の進歩や社会構造の変化によって揺れ動く人間の尊厳を改めて問い直すきっかけを与えてくれるだろう。今後、人間とは何か、価値とは何かという視点から、人間の尊厳を根底に置いた具体的な教育プログラムを構築していくことが求められるだろう。

5. おわりに

価値や思想は、それを3人称的に語るのではなく、1人称として生きる一人一人にとって、それがどのような意味をもつのかという視点から語らなければならない。内なる優生思想も、パーソン論も、3人称の立場からそのロジックを語ることはできるだろう。しかし自分自身が1人称、2人称の立場に置かれたとき、そのロジックが通用しないのであれば、それは社会に援用するにふさわしい思想とはいえない。

また価値や思想を議論するときには、生きる人間としての主体に目を向けなければならない。人間存在そのものに意味を与える根源的領域「スピリチュアリティ」を加えた「全人」こそが、いのちを生きる主体となる。健康な体だけが生きるのではなく、自己意識だけが生きるのでもない。人間存在の全体を統合し、「いのち」という視点を与えてくれるスピリチュアリティに立つとき、私たちはその「違い」ではなく「同じ」であること（存在価値において同質であること）に気づかされる。

社会福祉の価値・思想・哲学を見直すことは、始めにも終わりにも、人間存在とは何かを議論することにつきる。WHOがスピリチュアリティを含めた「全人回帰」に向かったように、社会福祉も、価値、知識、技術の総体へと「原点回帰」するときがきている。知識・技術の偏重から、価値・思想・哲学にもう一度目を向け、人間とは何か、価値とは何か、社会福祉は何を目指すのかといった真摯な議論を重ねていく必要がある。すべての価値が（いのちの価値さえも）相対化してい

く時代だからこそ、社会福祉はその原点に立ち返ることが今、求められるのではないだろうか。

註

- 1) パーソン論の立場においても、人間が「最小限の社会的相互作用に参加できる場合」は、厳格な意味でのパーソンではないが、社会的意味でのパーソンと認め、保護の対象とする立場もある。この立場では、新生児殺しなどを認めることはない。
- 2) 社会正義、正義論については詳しく述べることはしないが、功利主義、選好功利主義、自由至上主義、共同体主義については、ベンサム、シンガールの論、ロールズ、サンデルなどの著作を参照していただきたい。
- 3) 嶋田(1980)はその著書「社会福祉の思想と理論」の中で「全人的人間」について述べている。ティトマスが、社会福祉政策の目的はコミュニティの中にある個人の「アイデンティティ」の確立にあると主張したのに対し、嶋田は直接ティトマスにその意味を問うたところ、ティトマスから“The unified personality of the whole human being, which is the distinctive character belonging to an individual”と解説を受け、この「全人的人間」に強烈なインスピレーションを受けたという。そして1968年ヘルシンキ国際社会福祉会議において社会福祉活動が常に人権意識を出発点とすべきことが強調された折り、その「人権」の拠って立つ価値観の内容を表す思想こそがこの「全人的人間の統一的人格の確立」である、と回顧している。嶋田は、全人的人間の概念について詳しく記していないが、衝撃を受けた「全人的人間」は、「我が国の風土には未だ馴染みえぬものとして、その表現に躊躇を感じていたものを端的に言い現している思想であった」としていることから、全人的人間は嶋田の社会福祉思想の根幹に触れるものであったと推察する。
- 4) 生活上の困難の背後には必ずや、生きる意味のなさや関係性のなさによる苦しみ(スピリチュアルペイン)が潜んでいる。そのような苦しみに敏感であるソーシャルワーク(Spiritually-Sensitive-Social Work)は、アメリカのソーシャルワークプログラムの認定評価機関 The Council on Social Work Education (CSWE) が実践を促進している (Sheridan, et. al. 2012)。また国際ソーシャルワーカー連盟 (IFSW) の倫理綱領—

原則 (Principles) 7, Treating People as Whole Personsには、“Social workers recognize the biological, psychological, social, and spiritual dimensions of people’s lives and understand and treat all people as whole persons.”と記載されている。

参考文献

- 秋山智久 (1980) 『社会福祉実践論：方法原理・専門職・価値観』改訂版、ミネルヴァ書房。
- Bartlett, H. M. (1970) *The Common Base of Social Work Practice*. National Association of Social Workers Inc.
- Brown, H. C. (1996) The knowledge base of social work. In Vass, A. A.(ed.) *Social Work Competences: Core Knowledge, Value and Skills*. Sage Publications.
- Canda E. R.; Furman L. D. (2010) *Spiritual Diversity in Social Work Practice: The Heart of Helping*. Oxford University Press (木原活信・中川吉晴・藤井美和 (監訳) (2014) 『ソーシャルワークにおけるスピリチュアリティとは何か—人間の根源性にもとづく援助の核心』ミネルヴァ書房。
- 藤井美和 (2010) 「第1章 生命倫理とスピリチュアリティ」藤井美和・浜野研三他編著『生命倫理における宗教とスピリチュアリティ』晃洋書房。
- 藤井美和 (2015) 『死生学とQOL』関西学院大学出版会。
- Gordon, W. E. (1965) Knowledge and values: The distinction and relationship in clarifying social work practice. *Social Work*, 10(3), 32-39.
- 浜野研三 (2017) 「『人間である』という概念の意義：種差別批判に抗して」『人文研究』67(1), 1-17.
- 児玉聡 (2010) 『功利と直感』勁草書房。
- Jankélévitch, V. (1966) *La Mort*. Flammarion. (中澤紀雄訳 (1978) 『死』みすず書房)。
- Kluckhohn, C. (1951) Values and value-orientations in the theory of action: An exploration in definition and classification. In Parsons, T. and Shils, E. (eds.) *Toward a General Theory of Action*. Harvard University Press.
- Maslow, A. H. (1968) *Toward a Psychology of Being*. Van Nostrand, Rainhold.
- Maslow, A. H. (1971) *The Farther Reaches of*

- Human Nature*. Penguin (上田吉一訳(1973)『人間性の最高価値』誠信書房).
- 見田宗介 (1962) 「価値意識の構造と機能—価値の社会学への序説」『社会学評論』13(2), 38-52.
- Pearce, J. (1996) The value of social work. In Vass, A. A. (ed.) *Social Work Competences: Care Knowledge, Value and Skills*. Sage Publications.
- Reamer, F. (1999) *Social Work Values and Ethics*. Columbia University Press.
- Sheridan, M. J.; Husain, A. & Canda, E. R. (2012) Translating Research/Teaching Expertise into Curriculum Resources: CSWE's Religion & Spirituality Clearinghouse, CSWE-58th APM, Washington, DC, November 11, 2012.
- 嶋田啓一郎 (1980) 「第1章社会福祉思想と科学的方法論」嶋田啓一郎編『社会福祉の思想と理論：その国際性と日本的展開』ミネルヴァ書房.
- Singer, P. (1993) *Practical Ethics*, Second edition. Cambridge University Press (山内友三郎・塚崎智監訳(2002)『実践の倫理』[新版]昭和堂).
- Tooley, M (1972) Abortion and infanticide. *Philosophy & Public Affairs*, 2(1), 37-65.
- Tornstam, L. (1993) Gerotranscendence: A theoretical and empirical exploration. In Thomas, L. E. and Eisenhandler, S. A. (eds.) *Aging and the Religious Dimension*. Greenwood Publishing Group.
- World Health Organization: Preamble to the Constitution of the World Health Organization as adopted by the International Health Conference, New York, 19-22 June, 1946; signed on 22 July 1946 by the representatives of 61 States (Official Records of the World Health Organization, no. 2, p. 100) and entered into force on 7 April 1948.
- World Health Organization (1998) Executive Board 101st Session, Resolutions and Decisions, EB101.1998/REC/1, 52-53.
- 米本昌平 (2000) 「第一章イギリスからアメリカへ—優生学の起源」米本昌平・松原洋子・棚島次郎・市野川容孝著『優生学と人間社会』講談社現代新書.

The value of social work: Supporting human dignity

Miwa Fujii

School of Human Welfare Studies, Kwansai Gakuin University

Value is an essential element in social work practice, along with knowledge and skill. The pioneers of social work in Japan had strong belief in and valued social work practice. Because social work practice began to focus more on scientific approaches, such as evidence-based practices, in the 2000s, values have come to have less and less effect in social work on both practice and education. It is imperative that values be reassessed in modern society to evaluate human beings and consider human dignity as a relative value. The objectives of this study were to discuss social work values and present a holistic understanding of human beings in social work and its practices. The author first discussed value as such, then reviewed ideas of eugenics and the personhood argument, and finally presented a perspective on human beings in social work. It is high time we returned to the basis of social work and recognized what social work values really are.

Key words: social work value, human dignity, eugenics, personhood argument, whole person